

2011.2.17

原子力米を追って

原発国家

中曽根康弘編

1

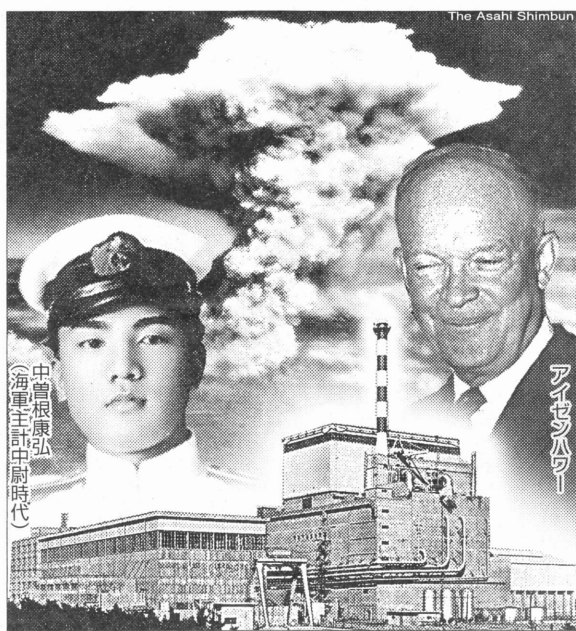
平和利用論持ち込む

米国の原爆投下で敗戦を受け入れた日本は、今日の「原発国家」に至る道を米国に付き従って歩いた。その先に、史上最悪の原発事故があった。菅政権は米国人の専門家を首相官邸に招き入れ、対応策を練り上げた。日本が頼ったのは、やはり米国だった。

「長期的国策を」

原発国家・日本を振り返るに欠かせない中曽根康弘(93)の政治人生は、米国抜きには語れない。

米大統領アイゼンハワー



中曽根康弘
(海軍主計中尉時代)

アイゼンハワー

が国連総会で「アトムズ・フォー・ピース(原子力の平和利用)」を唱えたのは1953年。ソ連が水爆実験に成功し、米国は慌てて原爆を積極的に輸出していた。原爆を積極的に輸出

20世紀最大の発見。平和利用できなければ日本は永久に4等国に甘んじると思った」と著書やインタビュで繰り返している。

この年、中曽根はハーバード大学の国際セミナーに招かれた。主催はのちの国務長官キッシンジャー。22カ国から45人が集まった。

その後、中曽根はサンフランシスコに寄り、カリフォルニア大バークリー校の原子力研究者、嵯峨根遼吉に出会う。そこで最先端の原子力技術に触れた。「長期的な国策を確立しろ」と説かれ、「日本もボヤボヤしては行かないと痛感した」と述懐している。

吉田茂が講和条約に調印

1945年	8月6日 広島に原爆投下 9日 長崎に投下 15日 ポツダム宣言を受諾、日本敗戦
1947年	4月25日 中曽根、総選挙で初当選
1951年	9月8日 対日講和条約、日米安保条約調印 12月20日 米国が世界初の原子力発電に成功
1953年	7月3日 中曽根、ハーバード大のセミナー参加で渡米 8月12日 ソ連が水爆実験に成功 12月8日 米大統領アイゼンハワーが「アトムズ・フォー・ピース」演説
1954年	3月1日 米国水爆実験で第五福竜丸が被曝（ひばく） 4月3日 日本初の原子力予算が成立 12月25日 政府、原子力平和的利用海外調査団を派遣
1955年	7月20日 海外調査団が報告書提出 8月8日 ジュネーブで第1回原子力平和利用国際会議
1956年	1月1日 原子力委員会が発足

「キノコ雲見た」

を見た人に会ったことはない。市にも記録は残っていない。

し、日本が独立を回復して2年。軽武装・経済優先の吉田は、憲法改正や再軍備を唱える中曽根の目に「対米従属」と映った。

一方で米国から期待されることを喜んでもいた。中

曽根は96年の著書で自らを招請した米国の狙いについて「吉田的なものにこのま

ま日本が流れていってはいけない。新しい政治家を育てなければと考えたんだと

思う」と分析し、吉田の政治への対抗心をみせた。

対米従属を嫌いなながらもどこかで米国に認められた

い。戦後日本の「二面性」にもがく姿がそこにある。

「原発」にこだわる原点は「原爆」のキノコ雲を見たことだ——中曽根はのちに何度も公言している。

45年8月6日朝。中曽根は海軍軍人として広島から

150⁺の西の空にものすごい大きな入道雲がもくもくと

上がるのが見えた。「この時私は、次の時代が原子力の時代になると直感した」

その「原点」を裏付ける材料は乏しい。高松で約6

00人の戦争体験談を集めた喜田清(78)は「キノコ雲

人物ではなかった。原子力

予算の構想は、直前にあった改進黨秋田県連大会から帰京の車中で、TDK創始者の斎藤憲三や、のちに法相となる稲葉修らが描いたものだった。中曽根はそこにいなかった。

「自分がやったみたいなことばかり言ってるが、うまいことしたんじゃないか」。原子力行政の重鎮である島村武久は、歴史検証を目的に官僚らの証言を集めた「島村研究会」で中曽根をそう評している。

政界の階段を駆け上るにつれ、中曽根は原発推進でも絶大な影響力を振るっていく。原子炉技術も原子力行政の制度も当初は米国からの借り物だったが、「自立した国家」を掲げるには原発を主体的に導入したとみせる必要があった。いつしか、日本社会は自力で原子力を制御できると過信した。私たちがそれに気づくのは、初の原子力予算から57年後の3月11日である。

肩書は当時、敬称略(富名腰隆) ▼1面参照

大衆の懐柔に奔走

原発 国家

中曽根康弘編

2

中曽根康弘と二人三脚で原発を導入した人物がいる。33歳年上の正力松太郎だ。読売新聞と日本テレビを率いた戦後復興期の「メディア王」が担った役割は、日本社会の原子力への抵抗感をやわらげる「世論対策」だった。

湯川博士を起用

中曽根は1955年10月、国会の原子力合同委員会の委員長に就任した。一方、翌年1月に発足した政府の原子力委員会の初代委員長に就いたのが、55年2



原子炉を見る昭和天皇(右)
写真は近畿大提供

正力松太郎(右)
湯川秀樹(左)

街頭テレビに集まる人々
(新橋駅前)

月の総選挙で69歳で初当選したメディア界の大物、正力である。ふたりは、ノーベル物理学賞を受賞して国民的人気の高かった湯川秀樹を原子力委員会の委員に起用するため奔走した。

正力は当時、朝日新聞のインタビューに「できるだ

情は高まり、原水爆禁止世界大会が東京で開かれ、原子力へのアレルギーは強かった。国民が納得する「原子力の顔」をふたりは探し求めていた。

正力の秘書だった萩山教蔵(79)は「中曽根さんは正力先生を訪ねては『正力閣下』と呼んで慕っていました」と言う。中曽根は自らの国会演説がソ連を批判したと社会党から批判を浴びて議事録から削除されると、正力に頼んで読売新聞に全文を掲載してもらったと著書で明かしている。

正力は戦前、警察官僚だった。共産党員の一斉摘発を指揮したこともある。原発による経済発展で共産主義の拡大を防ぐ思想も持っていた。米国は、正力が米国の専門家を招いて原子力

1953年	
8月28日	初の民間放送として日本テレビが開局
1954年	
1月1日	読売新聞が原子力連載を開始
3月3日	中曽根らが初の原子力予算を提案。翌月成立
1955年	
2月27日	衆院選で正力が初当選
5月9日	米国の原子力平和使節団が来日
11月1日	東京で原子力平和利用博覧会が開幕
11月15日	保守合同が実現し、自民党誕生
11月22日	正力、鳩山内閣の原子力担当相に就任
12月16日	原子力基本法など関連法が成立
1956年	
1月1日	原子力委員会が発足。正力、委員長に就任
1957年	
7月10日	正力、岸内閣で科技庁長官に就任
8月27日	茨城県東海村の実験炉で日本初の「原子の火」がともる
1959年	
5月12日	昭和天皇が国際見本市で米国製原子炉を視察
6月18日	中曽根、岸内閣で初入閣。科技庁長官に就任
1969年	
10月9日	正力、84歳で死去

をアピールした「原子力平和使節団」や、読売新聞主催の「原子力平和利用博覧会」に協力した。読売新聞は、原子力の将来性を訴える連載「ついに太陽をとらえた」などのキャンペーンを展開した。

昭和天皇も視察

正力には、政治への野望があった。高齢を跳ね返して政界を駆け上がるために「原子力」を旗印にしようと考えた。55年2月に故郷の富山2区から立候補した時の公約は「原子力の平和

利用」。秘書の萩山は「田舎の支持者はピンと来なかった」と振り返る。巨人の選手も動員したが、次点と271票差の初当選だった。

原子力委員長の執務室は首相官邸に構えた。窓ガラスは汚れ、じゅうたんはほこりっぽい。職員の子小枝子(89)はビール会社の景品をコップとして使っていたと振り返る。正力はそれでも「官邸」に固執したが、首相の座は遠かった。科学技術庁長官の正力は57年8月、日本初の原発運

営会社の形態を巡って民間主導を主張し、国家主導を唱える経済企画庁長官の河野一郎と対立した。中曽根は河野派だった。「風見鶏」と呼ばれる中曽根がこのとき、正力に肩入れした形跡はない。

正力は民間に原発の運営を任せることで押し切ったが、実力者に刃向かった代償として政治的立場を弱める。一方の中曽根は59年に初入閣。やがて河野派の大半を引き継いで中曽根派を旗揚げし、首相への足がかりをつかむ。

59年6月、正力は昭和天皇を後楽園球場に迎えた。長嶋茂雄がサヨナラ弾を放つ天覧試合で、プロ野球は黄金時代を迎える。

その前月、昭和天皇は東京での国際見本市で米国製の研究用原子炉を2階の階段を上つてのぞきこんだ。経企庁長官の世耕弘一は「陛下もご覧になったんだから大丈夫だよ」と言っているが総長を務める近畿大にこの原子炉を購入した。原爆投下から14年、第五福竜丸事件から5年。日本の大衆社会の原子力アレルギーはかなり払拭された。その後、正力が入閣することとはなかった。

50年余が過ぎ、原発事故による電力不足でプロ野球は節電対策のやり玉に挙がった。東京ドームの巨人戦は例年より2割ほど暗い。一角にある野球殿堂の一番手前に掲げられた正力のレリーフも、以前より陰っている。肩書は当時。敬称略 (山岸一生)